

控 訴 趣 意 書

被告人 廣 野 秀 樹

右の者に対する傷害被告事件についての控訴の趣意は、左記のとおりである。

平成十二年二月二十六日

右弁護人 小 堀 秀 行



名古屋高等裁判所

金沢支部 御中



50

原判決は、被告人を懲役一年八月に処するとしたが、右判決は次に述べる事情に

照らすと重きに失し、量刑が不当であるので、破棄を求める（刑訴法三八一条）。

一 犯行の態様

被告人は、前科となっている刑事裁判に対する不満を持っており、このことで被害者と話し合いをしていたところ、被害者の言葉に思わずカッとなって暴力に及んだものであり、一時的な感情によるもので、計画的な犯行ではない。

二 反省状況

被告人は、本件を深く反省し、捜査段階から事実関係を素直に認めており、反省悔悟の情は顕著である。

三 再犯の可能性

被告人は能都町で母親と一緒に生活することを約束しており、被告人の反省状況と今後家族の監督が期待できることを考えれば、再犯のおそれは全くないと言える。

四 被告人の心情

被告人が提出した控訴趣意書（表題は弁護趣意書）のとおりである。

五 まとめ

平成12年2月23日  
本書謄本を検察官に送達  
裁判所書記官

以上述べた被告人に有利な情状を考慮すると原判決は重きに失するので、その  
破棄を求める。

以上

これは抄本である  
令和6年2月14日  
金沢地方検察庁検察事務官 田中裕子

